

れんさい 2

D・I・Cのこと

おぜきひろし

D・I・C、こと共産主義青年団は毛沢東主義者である。人民に学び人民に奉仕することを目的とした彼らは、下放運動の一環として、沖縄の最北端にある奥部落に入り込み、共同体を組織していた。協同化社会を形成している奥部落こそ、彼らの生きた教育の場であった。ところが……

しかし、D・I・Cは、結果として奥部落を出なければならなかった。その直接的動機は、「連合赤軍事件」であった。

「(三月十五日)私達は、私達が住んでいたフパダナの二人の地主さんから、土地を返して欲しいと言われました。……確かに私達と連合赤軍とは別の組織です」「私達と連合赤軍とは違つ」と言つて、奥に残ることはできなかつた。しかし、私達は奥を去ることにはしたのです。奥を去るのは、私達が連合赤軍の同志達の心を受け継ぎ、その誤りを正し、彼らの名誉回復をはからなければならぬと感じたからです。……」

「私達は連合赤軍を支持します。特に、そのリンチの精神を支持します。」と公言する。何故なら「彼らがぶつかつていた問題は、私達がぶつかつていた問題でもあり、今日、革命を志す人達が皆共通してぶつかつている問題であると思います。」との向題とは何か。彼らの言葉によると次のようなものになる。「私達は、まだ秀い心、支配者の心の残りかすを持つ

ていますし、今の世の中はそういう汚い心で湧れていますから、当然外からもそういう考えが入り込んできます。……こういう心がしのび込んできたら、……次第に心におごりが生じ難儀な仕事をしている人達と心が離れてしまい、身体はここにあつても目は別の所を向いている、表向きは

連合赤軍事件と奥部落との別離

皆と一緒にすることをやめていこう、心は外にあるということになつてしまします。こうなつた人間は、もう味方ではなくなりません。彼らは、このように内部に入り込んでくる敵とあくまで同じ坂こうとしました。立派だと思えます。私達は、この点を真剣に学ばねばなりません。」

また、彼らはこうも言う。「私達は、彼らはどういう人間を、何故

殺したのか。『言い換えれば、何彼らほどのよつば問題を解決しようとしたのか』と考えるのが正しいと思ひます。」

これを読んで、毛沢東の劉少奇批判、林彪批判を想起したのは私一人であろうか。正統一異端の相剋は、マルクス主義の常とは言え、奪権斗争が革命の名のもとに正当化されているのを看過すわけにはいかない。しかし、我々は我々なりに、D・I・Cが野放しにも明言した「彼ら(連合赤軍)が、無節操で、山で、自分の身を守ることに考えていない人達によって、患者にされ、葬り去られるのを、私達は黙って見過すわけにはいきません。」という言葉に忝じなければならぬだろう。それも、D・I・Cが批判しているような、「○○を評価する」とか「評価しない」という主体を抜きにした表現ではなく、我々自身の行動の軌跡によって表現していかなければならぬ。

いずれにしても、このような考えと批判のもとに、D・I・Cは沖縄の奥部落を出、今、日本の最南端、表島で家内工業、農村工業を創業する運動を開始している。それに参加しているのは、D・I・Cの中でも少数精鋭の部隊だとうである。その他のメンバーは、四、五人で一つのグループを作り(三つ、四つのグループがあるようだ)、一方が山谷などで働き学ぶ生活を、他方で農村を回り、援農しながら農民と接触している。我々の赤栄郷共同体を訪れたのも、そのグループの一つであった。

3回は筆者がD・I・Cのことの話し合ひの中で聞いたこと、向嶺貞の指摘を備北はふりの紙面に掲載